

野附誠夫先生の御急逝を悼んで

野附先生の突然の訃報に全く驚いてしまった。先生は昔から非常に御壮健で病気などされたことは殆んど無く、頑健そのものといった御身体であっただけに驚きも特にひどかったのである。

私は昭和24年の12月の末から翌25年1月はじめまでのコロナ観測所での勤務から先生の御手伝いをはじめた。私が天文台に入台したのは昭和25年の4月1日であって、この乗鞍勤務の時はまだ鉄道技術研究所の職員であったのである。この辺からも野附先生一流の仕事の進め方がうかがえる。

先生はいつも静かで、怒った様な御様子は一度も見ない事がない。勿論部下をきつく叱る様なことは一度もなかった。

三鷹で同じ部屋に居たある日、ある御客様がつかつかと、この部屋に入ってこられ、そばに居た私がすぐ席を外さざるを得ない様な強い語調で先生を非難されはじめた。そのあとで先生に御目にかかったが、先生は常と全く変わらず、どこかで風でも吹きましたかといった御様子。

先生の一番の御苦勞はコロナグラフの何回かの試作とその試験観測、更に最終的に観測所の設置場所の決定で

あったであろうと想像している。「俺はこんな苦勞をしたよ」といった気負った御様子は全くなかった。又先生の方からこの事について私に話されたことは一度もなかった。

ここで一つだけ先生に叱られたことを思い出した。御恥かしい話であるが何かのことで少々頭にきて、翌日にうっかり先生に「昨夜はよく眠れませんでしたよ」と御話したら、先生は呆れた様な顔で「その位のことで眠れない様では、とても観測所はやってゆけませんよ」

先生と私とではどちらか一人が三鷹に残る必要があり、三鷹では忙がし過ぎてゆっくり御話は出来なかった。はじめの頃一度だけ山の上で御一緒したことがあった。その夜に何かのはずみで「君達もゲーテの作品位はよんだ方がよいよ」と言われて驚いたことがあった。

昨年暮に先生の御宅に参上した折に、ふとこのことを思い出してか、先生とゲーテの「ウィルヘルム・マイスター」についての話がはずんでしまった。あとで先生から一枚のおはがきを頂いた。それに「ミニヨンの話は楽しかったね」とあった。

今年も春になったら、また…… と思っていたところに突然の悲しい知らせ。

心から先生の御冥福を祈ります。

(長沢進午)

野附誠夫先生のありし日を偲んで

わが国における日食時外の太陽コロナの観測研究は、野附誠夫先生によって始められた。

昭和14年戦争のため計画は中断、戦後の昭和21年より光学系の研究と、手作りのコロナグラフによって試験観測が進められ、昭和23年8月12・13日に日本で始めて日食時外に太陽コロナ輝線(5303Å・6374Å)が乗鞍岳で観測され、翌昭和24年現在地に15坪のコロナ観測所が建設された。先生が50歳の時である。

戦後の食するものは勿論、総てに乏しい時代であって、苦難な試験観測を行い、日夜各方面に予算獲得のための折衝をされた結果急成長を遂げたが、それには先生の太陽の観測研究にかける熱意と、優しく静かで礼節を重んじられ、接する人を自然と動かしてしまうかざらぬお人柄によるものであった。

先生はコーヒーとお酒が大変お好きであられたが、決して生活の楽な時代ではなかったのに大勢してよく御馳走になったもので、「ドウカ・ドウカ」とすすめられる言葉には退くことの出来ない魔力が秘められていた。

人の一生において、必ず一度は人と人との大きな出合があると云われる。そうだとすれば、私にとっての野附

先生は、敗戦・復員そして心のやり場のない疲弊きつた時期に起きた大きな出合であり、先生のお人柄にうたれて“何うせ一度は戦で棄てた命であり、青山の如きこの先生ならば余った命を預けてもよい”と慕って仕え、何歳になっても御注意の頂ける有難い恩師であった。

あるとき先生は、「私は子供の頃にハレー彗星を見ましたが、今度来るときまで生きて見られるとよいですがね」と、彗星が話題となり出した頃おっしゃったことを思い出して、天文台で頂いた写真をお届けしたところ大変喜んでいただいた。二度目は手紙を添えてお送りしたところ早速お礼の電話が入り、花見のお約束をして楽しみにして居られたのに、その翌々日には突如として逝去されたとの知らせであった。そういえばいつもと違ってなかなか電話を切ろうとされなかったなと思い返され、あれがお別れのご挨拶だったのかと愕然とした。

お通夜は雨から雪に変わり、この時期の東京としては珍らしく銀世界となった。多くの方々“先生を迎えにきた雪だ”“この雪に乗って乗鞍に帰られた”とそれぞれに感慨深げであったが、いま乗鞍高原に立って独り白銀の乗鞍岳を眺めるとき、自然と胸を締め目頭の熱くなるものを禁じ得ない。 合掌

(森下博三(かもしか仙人))